

# ポパーと社会主義<sup>(1)</sup>

## I

ポパーは一般に自由主義者として知られ、また自分でもそれを自認しているようであるが、『知的自伝』からもわかるように、彼はオーストリアの社会民主党員として、十七歳からほぼ二十年間におたって社会主義とかかわりをもった経歴の持ち主である。ポパーは、様々な現実的な政治的事件と遭遇し、その理論的背景を批判的に分析し、また思想闘争を通じて、自分の思想、立場を築き上げていったと思われるが、その理論と実践は果たして一貫しているのであろうか、というのがわれわれの問題である。

現代の政治を動かしている大きな要因は三つある。それは「自由主義」<sup>(2)</sup>、「社会主義」<sup>(3)</sup>、「民族主義」である。それぞれの設定する目的、価値は異なっており、「自由」、「平等」、「民族の自決」である。特に日本では、社会主義即マルクス主義と考えられているが、本稿ではもつと広義にとり、非マルクス主義的な社会主義も社会主義と考えることにする。また、「社会主義」という概念を、個々の様々

## 立 花 希 一

な政治的立場、思想としてというよりむしろ、もつと原理的に把握し直し、平等こそを諸価値の中で第一義的なものとみなす思想として考えることにしたい。<sup>(4)</sup>したがって、ここでは主として、「自由」と「平等」という価値の相互の関係の考察を中心に分析をすすめていくことになるであろう。先ず、ポパーのおかれた政治的状况を概観することしよう。<sup>(5)</sup>

オーストリア（一九一八年以前は、オーストリア・ハンガリー帝国）においても、ヨーロッパの他の諸国と同様、自由主義は、貴族制と絶対主義に対する闘争に遡る。この自由主義の運動は、一八四八年の革命の失敗で敗退するが、一八六〇年代に、外国軍隊の手による古い秩序の破壊によって、オーストリアは、自らの力ではないが、立憲主義の原理と中流階級の文化的価値に適合した体制へと変革されるのである。したがって当初から、自由主義者は、貴族階級や帝国の官僚階級と権力を分有しなければならなかったのであり、二十年間にわたる支配の期間でさえ、自由主義者の社会的基盤は弱く、中流階級のドイツ人と都市の中心に住むドイツ系ユダヤ人に限

られていたのである。

そして、工業化に伴う資本主義の興隆と共に、新たな社会集団が抬頭し、政治的発言力を得るようになってきた。一八八〇年代には、それらのグループは大衆政党——キリスト教社会党、汎ドイツ党、社会民主党——を結成し、無拘束な資本主義や自由主義に挑戦するようになったのである。ここで注意しておかなければならないことは、ドイツ民族主義の思想的変化である。一八八三年以前のドイツ民族主義は、「民族主義的」(völkisch)ではなく、共和主義的で、反教権主義的な一八四八年の伝統を保持していたのであるが、ゲオルク・フォン・シェーネラー(Georg von Schönerer)がドイツ民族主義運動の綱領に、反ユダヤ主義(Anti-Semitism)を挿入して以来、同化主義的なユダヤ人までも、その運動から閉め出されることになったのである。ほとんどが中流階級の出身で、同化主義的なユダヤ人に開かれていた政党が、社会民主党だったのである。社会民主党が、反ユダヤ主義に反対する唯一の政党だったからである。もともと自由主義的思想の持ち主が、大量に社会民主党に流入したことは、社会民主党の思想にある種の特徴を付加することになったのである。<sup>(7)</sup>

第一次世界大戦敗戦の結果、オーストリア・ハンガリー帝国は崩壊し、オーストリア共和国が誕生したばかりのウィーンは、政治的、思想的大変動の時代に入したのである。経済は破綻し、飢えと寒さに見舞われた。革命はまさに起きようとしていたのである。

そうした状況の中で、社会民主党(その綱領はマルクス主義に基づいているが、ソ連のボルシェビズムとは一線を画すること、他方ド

イツ社会民主党の修正主義とも立場を異にするという独特な特色をもっていたことから、「オーストロ・マルクス主義」と呼ばれた)は、一九一九年二月十六日の憲法制定議会のための選挙で第一党となり、キリスト教社会党との連立政権とはいえ、社会民主党のカール・レンナー(Karl Renner)が首相となり、政権を担当することになったのである。

ミル流の急進的自由主義者で、社会問題に関心をもつ弁護士の父や、社会民主党員で、ウィーン大学経済学・統計学の教授である伯父(Walter Schif)をもつポパーが、十代の若さで早くから社会主義に興味をもち、社会主義的中等学生の団体の一員となり、一時的とはいえマルクス主義者になったことは、けだし当然のことといえよう。ところが、一九一九年六月十五日、ポパーにとって「生涯におけるもっとも重要な出来事の一つ」と回顧される事件が起こったのである。<sup>(8)</sup>

## II

少数派の共産党がクーデターによって労働者会議の独裁制を確立しようとし、そのデモで十二名が死亡し、八十名が負傷したのである。その数カ月前に、「共産主義者の宣伝によって教名の友人と一緒に回心させられ」ていた若き共産主義者、ポパーは、その事件をどのように受け止めたかを次のように語っている。<sup>(9)</sup>

私は警察の残忍な行為にぞっとし、強い衝撃を受けたが、しかしまたわれとわが身に恐怖を覚えた。というのは、私はマルクス

主義者としてこの悲劇に責任の一部を——少なくとも、原則的には——負っている、と感じたからである。マルクス主義理論は、社会主義の到来を早めるために、階級闘争を激化させることを要求するのである。

すなわちポパーは、マルクス主義者として、革命には犠牲はつきものであり、社会主義社会の到来という必然的な歴史の一過程にすぎないという考えを受け容れていたので、他人を死に至らしめたこととの責任の一端を負っているというのを、ハッキリ自覚したのである。ポパーは続ける。「無批判的に受け容れた教義のために、あるいは実現できないことが判明するかもしれない夢のために、他人の生命を危険にさらすのを義務にさせるような知識を、わが物とすることは恐るべきことであつた」と。

こうしてポパーは、共産主義、マルクス主義から離れたばかりではなく、反マルクス主義者になつたのである。暴力革命を志向する一部のマルクス主義（当時の共産党の奉ずる共産主義<sup>(12)</sup>）に限ってみれば、このポパーの批判はあつたてであるであらう。

ところが、社会主義は一枚岩ではないのである。オーストロ・マルクス主義といわれる社会民主党の社会主義、ベルンシュタインの修正主義<sup>(13)</sup> (Revisionism)、イギリスのフェビアン主義 (Fabianism) など、暴力革命を排除し、議会制民主主義を擁護し、平和的な手段で社会を変革していくことを提唱する社会主義の運動は当時もあつたのである。ポパーの批判は、このような形態の社会主義に対する批判にはなりえないように思われる。

ポパーは、この政治的事件について自分の見解を表明している文脈の中で、次のように述べている。

(一) 彼ら〔社会民主党員と共産党員〕のマルクス主義的信条は、當時きわめて似かよつていたのである。<sup>(14)</sup>

(二) 事件は、共産主義者によって扇動された……社会主義者たちのデモ行進中に起こつた、とし、私はマルクス主義者として……責任……を負つて<sup>(15)</sup>いる。

共産主義、社会主義、マルクス主義、社会民主党の信条があたかも同じであるかのごとくほめかし、その中でもっとも急進的な主義を批判することによって、他の主義も批判してしまつたかのような印象を読者に与えるのである。これはポパーの議論の巧妙な論法といつてよい。例えば、民族主義を批判する際に、一般に否定的な意味合いをもつ人種主義 (Racism) を民族主義と同列に並べ、「すべての民族主義または人種主義は悪であり、ユダヤ民族主義としてけつして例外ではない」と結論するやり方と酷似しており、合理的な批判とは呼びがたい代物である。ポパーは「批判的合理主義」の提唱者であるが、提唱者が必ずしもそれをつねに実践しているとは限らないのである。

ポパーはもはや社会主義者ではないという。ところが不思議なことに、社会主義を明確に批判しているところがほとんどなく、しかも抽象的な原理的な形で批判するにとどまっているのである。<sup>(17)</sup>

マルクス主義を棄てたあとでさえ、数年の間、私は社会主義者であり続けた。そして、もし個人的自由を兼備した社会主義とい

ったものがありえたとすれば、私はいぜんとして今もなお社会主義者であつたらう。なぜなら、平等な社会でつましく、素朴に自由な生活を営むことほど良いことはないからである。これは美しい夢にすぎないということ、また自由は平等より重要であつて、平等を実現しようとする企ては自由を危くし、自由が失われれば不自由者のあいだの平等さえないであろうということを、私のはつきり認識するまでには、なおしばらく時間がかかった。

これは社会主義に対する批判といえるであろうか。「自由」と「平等」がもし相互に矛盾し、一方を選択すれば自動的に他方を排除することになるならば、自由を選択する者は社会主義を拒否することになる。

しかしポパーは、「自由」と「平等」が相互に矛盾するものとは考えていないのである。もしそうでなかったら、ポパーは『開かれた社会とその敵』<sup>(18)</sup>の中で、「資本制」と「社会主義体制」という二つの可能性しかない」という考えを否定し、無拘束な資本制を国家干渉制に取り代えることを提案できなかったであろう。「自由の逆説」——無制限の自由は自由の破綻を導びくというもの——を容認したら、強者が弱者の自由を奪うことになってしまふと指摘し、それを防ぐためには、「われわれは、無制限な経済上の自由という政策を国家の計画的な経済上の干渉で置き換えることを要求しなくてはならない。われわれは無拘束な資本制が経済干渉制に道をゆずることを要求しなくてはならない」と述べている。これは平等の実現のために、自由を制限すべきであるという主張ではないであろう

か。<sup>(21)</sup>

「自由」と「平等」は、十八世紀の自由主義者が考えたように、両立し、したがって両方を実現できるというものではないけれども、だからといって相互に矛盾するものでもない。いわゆる自由主義諸国に住む社会主義者たちは、この部分的に衝突する「自由」と「平等」をどのようにしたらうまく折り合いをつけることができるかということに、知恵を絞っているのである。ポパーの「自由」と「平等」の衝突という言明は、社会主義を放棄し、自由主義をとるための大義名分としてではなく、むしろポパーを含めわれわれが解決すべく努力しなければならぬ課題であるという問題提起として受け取らなければならないのではないであろうか。

### III

ブライアン・マギー (Bryan Magee) によると、ポパーの哲学は「社会民主主義の哲学」<sup>(22)</sup>であり、「若きポパーはこれまで誰もしなかつたような民主主義の哲学的基礎のあるべき姿を確立した」<sup>(23)</sup>と述べている。確かにポパーの思想には、無拘束な資本主義や経済力のなすがままになる社会に戻ることを奨励するようなものは何もないし、またいわゆる福祉国家の道を歩むことに反対するものもなさそうである。だからといって、マギーのように、ポパーの思想を「社会民主主義」の思想とみなすわけにもいかないのではないであろうか。なぜなら、マギーもいうように、ポパーは「社会民主党に幻滅を感じ、・・・不信任を抱いて」おり、もし「お前の立場はどうなんだと強いて問いつめられたとしたら、自分は古典的意味での

自由主義者だというであらう<sup>(24)</sup>」ということをやマギー自身認めているからである。

それではポパーはなぜ社会主義者から自由主義者に変ったのであるのか。それを解くカギは、ポパーの社会民主党に対する評価にあると思われる。ポパーはなぜ社会民主党に幻滅を感じ、不信感を抱いているのであろうか。

ポパーは、全面的に社会民主党を非難しているわけではない。大目的のためには一切の手段が正当化されるので、無垢な人々を犠牲にしてもかまわないと考えるロシア共産党のボルシェビズムに追随しなかった点<sup>(25)</sup>、労働者に教育の重要性を植え付け、また人類の解放を促進するという熱烈な宗教的かつ人道主義的信念を鼓吹した点<sup>(26)</sup>については、ポパーは評価している。ここからもわかるように、社会民主党はあの一九一九年の重大な事件の原因をつくった共産主義とは一線を画していたのである。したがって、その事件は社会民主党批判の題材にはなりえない。

ポパーが社会民主党を批判する点は大きく分けて二つある。第一点は「歴史法則主義」(Historicism)に關係するものであり、第二点は「暴力」の行使についての曖昧さに関係するものである。

(-) a、社会民主党は政治的発言力、影響力をもつ機会に恵まれたにもかかわらず、社会変革の実践的な綱領、政策をもっていないかっただために、具体的な政治変革に失敗し、労働運動の挫折をもたらした<sup>(27)</sup>こと。

(-) b、ファシズムに対する抵抗を示さず、ナチスの権力掌握を許してしまっただ<sup>(28)</sup>こと。

そしてその原因をポパーは次のようにみている。

(-) a'、社会主義体制は必然的に到来するにきまつているというマルクス主義の信念を無批判的に受け容れていたから、無策のまま東通り資本制が自然に崩壊するのを待っていたこと<sup>(29)</sup>。

(-) b'、革命は不可避であるから、ファシズムはそれを招来する手段の一つにすぎず、さし迫った崩壊寸前の資本制におけるブルジョアジーの最後の抵抗線にすぎないのであるとみなして、それに抵抗しようとしなかったこと<sup>(30)</sup>。

すなわちポパーによれば、社会民主党の指導者は、社会主義の到来は不可避であるというマルクス主義的歴史法則主義の誤った信念をもっていたために、第一次世界大戦後、労働者が団結している時に、統治の責任を負い、より良い世界の礎石をおく機会がみつかったにもかかわらず、変革をしようとしなかったし、ファシズムの抬頭を許してしまっただばかりではなく、それに対する抵抗もしなかったというのである。

非常に抽象的で曖昧だという批判はさておき、この事実認識とその評価には異論があると思われるが、社会民主党が、ボルシェビキの理論と実践に対しては非常に批判的ではあつたけれども、そうかといつて西欧の改革主義的社会主義政党とは連帯せず、革命的な性格を残したマルクス主義政党だったこと、また政権担当者として政策を実行できるせつかくの好機をつかんだにもかかわらず、ファシズムの抬頭のまゝに破れ去ったことは確かであろう。ポパーは、社会民主党の失敗の究極の原因を、「社会主義は不可避である」という「歴史法則主義」的信念を抱いていたことにみる。その後、この

考えを發展させて『歴史法則主義の貧困』を著すが、マルクス主義は歴史法則主義であるという主張がマルクス主義一般にあてはまるかどうかはともかくとして、ポパーが当時のマルクス主義のブロンバ(32)に歴史法則主義を見出したことは確かであり、またそういった方が適切かもしれない。

ポパーの社会民主党批判の第二点を考察することにしよう。

(二)ポパーは、一九二七年七月十五日に起こった一九一九年の事件と類似する事件について、「(社会民主党)が暴力を行使するぞという脅しは、一九二七年七月に、ウィーンの多数の平和的で無防備な社会民主主義労働者や傍観者に対して銃撃を加える理由を与えた」と述べて、「社会民主主義の指導者たちはよかれと思つてやつたにせよ、彼らの方針は無責任かつ、自殺的であつた」と批判している。(34)

この暴力に関する見解は、『開かれた社会とその敵』でももう少し詳しく述べられている。(35)それを考慮しながらポパーの見解を要約すると、

政治制度には、被支配者が暴力によらずに支配者を交替させることのできる制度——これをポパーは民主制と呼ぶ——と、暴力によつてしか打倒できない制度——専制 (Tyranny) ——とがある。民主制の存在する社会では、暴力に対する一切の企てに対して反対しなければならない。オーストリアは不十分なが民主制を備えた社会であつた。それにもかかわらず、オーストリア社会民主党はマルクス主義ののつとつて暴力に対する態度を曖昧なままにしていた。初めに独裁制 (Dictatorship) を持ち込もうとするファシストの企て

があるからといって、暴力に訴えてそれに対抗するための独裁制を樹立しようとする企ては、ファシズムと同様に犯罪行為である。これは民主制を守ろうとする人々に疑惑を抱かせることになる。その結果、民主制はさらに弱まることになり、反民主主義者、反人道的主義者、ファシストの勢力を助長させることになった。社会民主党のつた政策はまさにこれであつた。

この見解についても、若干事実訂正が必要がある。この事件は、社会民主党指導者のもとに行われた事件ではないのである。社会民主党防衛同盟の労働者と八歳の少年を殺害した容疑で逮捕されていた三名の右翼兵士を放免したことに對して抗議するために、自発的に集まつた多数の労働者と警官の間で偶発的に衝突が起り、八十五名の労働者が死亡し、一千名以上が負傷したのである。党の指導力不足で労働者を統率できなかったという謗りは免れないかもしれないが、だからといって、社会民主党指導者は、暴力を行使するぞという脅しをしてはいないのである。(36)

また、社会民主党の暴力に対する態度は曖昧ではなく、一九二六年のリンツ綱領に次のように述べられているといわれるかもしれない。(37)

社会民主労働党は、憲法で堅持されているあらゆる制限規定を敵格に守つて、民主国家の規則に厳密に従つて統治するであらう。しかしながら、ブルジョアジーが経済をポイコットしたり、反乱を扇動したり、あるいは外国の反革命勢力と共謀したりすることによつて、労働運動が権力につこうとして実行の約束をしている

社会変革を妨害しようとする場合には、社会民主主義はこのような抵抗を打破するために独裁的な手段を採用せざるをえないであろう。

この「防衛的暴力」の考えに対してポパーなら、このために社会主義者が独裁制の野心を抱いていることの証拠としてみなされ、逆に反社会主義者に暴力の使用の口実を与えてしまったのだと、批判するであろう。

それでは、ポパーはあらゆる暴力に反対する絶対平和主義者なのであるか。そうでないことは、『開かれた社会とその敵』に書かれていることを読めばすぐに判明する。<sup>(38)</sup>

わたくしはあらゆる場合にあらゆる状況下のもとで暴力革命に反対するものではない。・・・専制のもとでは・・・暴力革命が正当化されるであろうと信じる者である。・・・政争での暴力の行使でわたくしが正当化されると考えたいものももう一つだけある。・・・ひとたび民主制に達したあと、(国内からにせよ国外からにせよ) 民主憲法や民主的方法の使用に反対して加えられるすべての攻撃に対する抵抗のことである。そうした攻撃はどんなものでも、ことにそれが権力の座にある政府からきていたり、政府が許容しているものであるならば、たとえ暴力の行使に及んでもあらゆる忠誠な市民が抵抗すべきものである。

すなわち、力が支配し、民主制の存在しない社会に民主制を実現

しようとする場合と、暴力にせよ多数派工作という手段をとるにせよ、民主制が破壊される危険がある場合にのみ、暴力の使用が正当化されるというわけである。

すると、社会民主党は、ファシズムによって民主制が破壊されようとしたからやむをえず防衛手段として暴力に訴えようとしたのであり、したがってポパーの見解と何ら変わるところがないのではないかといわれるかもしれない。それでは、暴力の使用に関して、ポパーの見解と社会民主党の綱領の見解とはどこが違うのであろうか。実は大きく違くとポパーならいうであろう。

わたくしは民主制の確立と擁護のためにだけ暴力が許されると考えているのに対し、社会民主党は、社会主義の実現が阻止される場合に、対抗措置として暴力を用いることが正当化されると考えているのであり、目的が相違しているのであると。

ここにおいて、ポパーの目的と社会民主党の目的の相違がはっきりしたようである。「自由」と「平等」という理念のうち、社会民主主義者は「平等」を第一義的なものと考えているのに対し、ポパーは「自由」を第一義的に考える。そして「自由」を拡大し過ぎることによりかえって「自由」が脅かされる場合に、自由を制限しようとする、すなわち平等を考慮に入れるのである。「平等化」のための政策を提唱するのもポパーにとっては、個々人の自由を「最适度」(optimum)にするためであろう。第Ⅱ節で引用したポパーによる社会主義の原理的批判は、自由の枠内で不平等を是正していくことは可能だが、その逆は不可能であるというポパーの考えを表明したものと読むこともできよう。

ポパーの立場が、オーストリア社会民主党の立場と相容れないことはわかったけれども、それではいっそう穏健な、改良主義的社会主義について、ポパーはどういう見解をもっているのであろうか。これについては、まったく断片的な発言にとどまっている。あまりにも少ないので、すべて簡潔書きにできるほどである。

(一)〔急進派(共産主義)と穏健派(社会民主党)の〕両者の中間に位置するような立場があるのはもちろんである。また、よりいっそう穏健なマルクス主義の立場もある。特にA・ベルンシュタインのいわゆる「修正主義」がその例である。後者は事実上まったくマルクス主義を捨てている。それはあくまでも民主的で非暴力的な労働者の運動の提唱以外の何ものでもない。<sup>(39)</sup>

(二)社会工学(Social Engineering)の建設的な諸問題を取り扱った人物として、イギリスのフェビアン協会員、オーストリアのA・メングァー(A. Menger)、ポパーリョンコイス(J. Popper-Lynkeus)を挙げ、「彼〔ポパーリョンコイス〕はマルクス主義者によって『半社会主義者(Half-socialist)』として退けられた。彼が『半社会主義者』と呼ばれたのは、彼の社会に、私企業部門を描いていたからである。彼は国家の経済活動を万人の基本的要求——「保証された最低限の生活」——の配慮に限定したのである。それ以上のすべてのことは完全な競争制度に委ねられることになって<sup>(40)</sup>」。

(三)無拘束な資本制は新しい時代、政治干渉制、つまり国家の経済介入というわれわれ自身の時代、に道を譲ってしまった。干渉制は

様々な形態をとっている。・・・イギリスや合衆国の、またスウェーデンによって導入された「小規模民主制」の民主的干渉制がある。そしてそのスウェーデンでは、これまでのところ民主的な干渉の技術は最高の水準に達している。・・・スウェーデンの実験を始めた政党であるスウェーデン「社会民主党」はかつてマルクス主義政党であった。しかし行政上の責任を引き受けて、偉大な社会改革の計画に乗り出す決心をしてまもなくマルクス主義の理論を捨てたのである。スウェーデンの実験がマルクス主義から離れている点の一つは、独断的なマルクス主義者が生産を強調するのに対し、消費者および消費者協同組合の果たす役割を強調する点である。スウェーデンの技術的経済理論は、マルクス主義者ならば「ブルジョア経済学」と呼ぶであろうものに強く影響されており、正統的なマルクス主義の価値論は何の役割も果たしていない。<sup>(41)</sup>

非常に少ない情報ではあるが、ポパーの政治に対する見解は、よりいっそう明確になったように思われる。ポパーが非マルクス主義的社会主義を高く評価していることは確かであろう。民主制の枠内で個々人の自由を最適度に実現するために、社会の不平等を是正し、除去していこうとする形態の改良主義的社会主義——「社会的自由主義(Social-liberalism)」と呼ぶことにする——をポパーは実質的に唱えているからである。ポパーは、「自由」より「平等」を第一義的と考える社会主義者ではないけれども、古典的な自由主義者ともいえない。「自由」と「平等」に関しては、二者択一的な考え方をすべきではないのではなからうか。



二者択一でないのは、国家の経済介入の程度と範囲は一義的には決まらないからである。「最適度の自由」の観念は、個々人のもつ自由観、目的、関心、欲求や、他の人々との関わり、経済的發展の程度などに依存するのである。例えば、最低の生存権を保証するためにだけ国家は経済に介入し、それ以外は自由競争原理に委ねるべきだというポパーリユニョイスの見解は、現在のわれわれから見れば、すでに保守的なものに映るであろう。それだけわれわれの社会観は進歩しているのである。

したがって、問わなければならないことは、個々の状況において、どの程度の国家干渉が短期的あるいは長期的にみて、自由を失わずに不平等をなくすという目的にとつて、もつとも効果的な手段になるかということである。様々な立場の人々、様々な利益を代表する人々の間で、批判的議論を行うことによって、その暫定的解決が見出だされるであろう。それには先ず、各人が主義主張への独断的信奉を捨てるべきであろう。そして様々な理論を一つの意見として、対象化し、批判的に検討することが重要である。各人が、「批判的合理主義」の態度をとろうとすることが、様々な問題の解決への一歩となるろう。

ポパーが自ら遭遇した様々な体験から一つの政治的立場をとっているからといって、彼の提唱する「批判的合理主義」はその政治的立場を代弁するイデオロギーにはかならないとみなしてはならない。「批判的合理主義」はどんな政治的立場の人でも採用することのできる形式的方法なのである。「批判的合理主義」を一言でいい表わしたワトキンスの言葉は傾聴に値しよう。<sup>(4)</sup>

議論や論争において、他の人々をけつしてあなたの思想への単なる潜在的改宗者として扱ってはならず、つねにあなたの思想の潜在的批判者、改善者として扱わねばならない。

## 注

(1) オーストリアの哲学者、思想家は従来、彼らがドイツ語圏に属していることから、ドイツ哲学に一括して取り扱われるのが通説であり、何ら独自の地位を与えられていなかったが、近年になってオーストリアへの関心が高まり、オーストリアの文脈自身の中から彼らを考察しようとする気運が生じつつある。筆者は、ポパーについてこの試みに沿った研究を続けているが、本稿はその研究の一部である。

(2) K. R. Popper, *Intellectual Autobiography*, in *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by Paul Arthur Schlipp, Open Court, Illinois, 1974, pp. 24-27. ナイト [IA] [PKP] と略記する。

(3) 民族主義の問題は、ポパーに非常に大きな影響を与えた重要な問題なので、別の機会に改めて取り上げることにした。

(4) 社会主義の理念を「平等」とみなす考え方は、J・アガンの次の発言から学んだ。彼はいう。「平等の観念は当然、社会主義の基礎にある。その逆ではない。つまり、あらゆる社会主義者は平等のない社会主義という考えには眉をひそめ、それはエセの社会主義であるとすらきめつける。他方、率直な社会主義者なら誰でも社会主義なしに平等を企てることができるなら

社会主義は無用にならう」といふことを簡単に全くアプロオリテ承認するであらう」と。Joseph Agassi, *Towards A Rational Philosophical Anthropology*, Nijhoff, The Hague, 1977, p. 282.

(5) オーストリアの一般的な、社会的、政治的状况の叙述は、Carl E. Schorske, *Fin-de-siècle Vienna: Politics and Culture*, Vintage Books, New York, 1981. 又 Anson Rabinbach, *The Crisis of Austrian Socialism: From Red Vienna to Civil War 1927-1934*, The University of Chicago Press, London, 1983. によるところが多い。また、ユダヤ人のおかれていた社会的、政治的状况の叙述は、Robert S. Wistrich, *Socialism 19 and the Jews: The Dilemmas of Assimilation in German and Austria-Hungary*, Associated University Presses, London, 1982, Steven E. Aschheim, *Brothers and Strangers: The East European Jew in German and German Consciousness, 1800-1923*, The University of Wisconsin Press, Wisconsin, 1982. (6) William J. McGrath, *Student Radicalism in Vienna*, in *Journal of Contemporary History*, 2, 1967, pp. 183-200. 人種主義的な民族主義に変質する以前には、多くの同化主義的なユダヤ人——例えば、Victor Adler, Arthur Schnitzler, Sigmund Freud, Heinrich Friedjung, Gustav Mahler, Theodor Herzl など——は、学生時代に汎ヨーロッパ民族主義運動に参加したのであるし、また一八八二年のシェーネラーのリンツ綱領作成には、アドラーは、フリードユンクと共に協力している。ところが、

反ユダヤ主義への変質のため、例えば、アドラーは社会民主党へ、フリードユンクは自由主義へ、ヘルツルはツィオニズムへと変わっていったのである。しかも三者および同化主義的ユダヤ人の間には共通する信条がみられるのである。それは自由主義、合理主義である。ユダヤ人は、一八六七年の憲法によって様々な差別的な規制が撤廃され、ゲッターから解放されることになったが、その解放の理念となったのが、啓蒙主義の自由主義的、合理主義的思想であった。したがって、解放されたユダヤ人がその理念を奉じるようになったのは当然のことといえよう。シュースキは、「ユダヤ人の運命は自由主義的でコスモポリタンのな国家の運命と共に浮き沈みした」と述べている。Carl E. Schorske, op. cit., p. 129.

(7) 中流階級のユダヤ人が大量に社会主義運動に参加するようになったことによつて、ウィーンで社会民主党がいかに発達したかを、ワルター・B・シモンは、統計を用いて鮮やかに描いてくさ。Walker B. Simon, *The Jewish Vote in Austria*, in *Leo Baeck Year Book*, 16, 1971, pp. 97-123.

- (8) Popper [JA], p. 25.  
(9) *ibid.*, p. 24.  
(10) *ibid.*, p. 25. 傍点筆者。  
(11) *ibid.*, p. 26.  
(12) 現在のユーロ・コミュニズムや日本共産党の共産主義は当然ここでは言及されていない。  
(13) ヘルンシユタインは、イギリス亡命中、フェビアン協会員

との交際から修正主義の考えを抱くようになったことは周知の事実であるが、やはりポパーの批判的合理主義、漸進的社會主義の思想が、ヒルンシタインに近づくことが指摘されている。

Robert S. Wistrich, *Back to Bernstein?*, in *Encounter*, June, 1978, pp. 75-80.

(14) Popper [IA], p. 24.

(15) *ibid.*, p. 25.

(16) *ibid.*, p. 83.

(17) *ibid.*, p. 27.

(18) Popper, *The open society and Its Enemies*, Routledge & Kegan Paul, London, 1973, vol. II, p. 142, 141 [OS] と略記する。

(19) *ibid.*, p. 124.

(20) *ibid.*, p. 125.

(21) 社會主義に公然と反対している自由主義諸国の中で、われわれが当然のものともみなしている政策がすでに社會主義的な政策であるというマガシの指摘は非常に示唆的である。Joseph Agassi, *op. cit.*, pp. 275-290.

(22) B. Magee, *Popper*, Fontana, Collins, 1975, p. 83.

(23) *ibid.*, p. 84.

(24) *ibid.*, p. 84.

(25) Popper [OS], vol. II, p. 144.

(26) *ibid.*, p. 337. 同じ感想が、Friedrich Adler (ヴィクトル・アドラー)の息子で、社會民主黨指導者の一人。ポパー父子の

友人でもある)によっても述べられていることを次の論文で知った。The Jewish Background of Victor and Friedrich Adler, in *Leo Baeck Year Book*, 10, 1965, pp. 266-276. エリカス・

ンラウンターは、この宗教的かつ人道主義的的信念が、ユダヤ教の「メシア主義」や「使命」の觀念と關係があることを指摘している。Julius Braunschlag, *In Search of the Millennium*, London, 1945, p. 17.

(27) Popper [OS], vol. II, pp. 143-145.

(28) *ibid.*, pp. 164-165, p. 336.

(29) *ibid.*, pp. 143-145.

(30) *ibid.*, pp. 164-165, pp. 336-337.

(31) 社會民主黨批判として、一つの事件が具体例として挙げられているが、それが的はずれであることはすでに指摘した通りである。社會民主黨は戦後すぐ第一党になったけれども、過半数を占めていたわけではなく、キリスト教社會党との連立政権であったこと、しかも一九二〇年六月には、キリスト教社會党とドイツ國民黨との連合に破れ、政権をあげわたしたことが指摘されよう。敗戦処理および新生國家建設という様々な難問を抱えた時期に、わずか十九カ月間政権の一部を担当しただけで何ができたか、ポパーはいうのであろうか。そればかりではなく、社會民主黨は、社會福祉、市民への奉仕を掲げて、住宅不足の解消、教育改革——これにはポパーも参加したはずである——、健康管理・疾病予防のための政策を次々に実行していたのである。ポパーは現代社會における諸害悪、不幸の例とし

て、貧困、失業、病苦、教育の不平等、戦争を挙げ、それらを除去または軽減するための政策を提案しているが、もし社会民主党が引き続き政権を担当していたら、かなりの程度実現されていたであろう。

(32) ポパーはいう。「ウィーンで私が研究している頃、左翼と右翼のサークルの雰囲気はひどく歴史法則主義的であった。「歴史はわれわれの手にある」というのが、ナチ・・・からも社会民主党員からも聞かれる叫びだった」と。[PKP], p. 172. 傍点筆者。確かにマルクス主義者は、「必然性」とか「不可避性」といった言葉を、特にプロバガンダや演説では用いる。ポパーはそれを把えて、「マルクス主義を歴史法則主義とぎめつけただのこめくれなご。」

(33) Popper [IA], p. 85.

(34) *ibid.*, p. 85. 原文イタリック。

(35) Popper [OS], vol. II, p. 150, 154, pp. 156-157, pp. 342-343.

(36) とはごつてごつてこの事件がその後の内戦と社会民主党の解体を導く、主要な原因となったことは否定できない事実である。Nobert Leser, *Austro-Marxism: A Reappraisal*, in *Journal of Contemporary History*, 1, 1966, pp. 117-133.

(37) Die österreichische Sozialdemokratie im Spiegel ihrer Programme, Wien, 1964, s. 43, Nobert Leser, *op. cit.*, p. 130 に引用されてる。

(38) Popper [OS], vol. II, pp. 151-152.

(39) *ibid.*, p. 339. \*ポパーは「A. Bernstein」と言及しているが、修正主義を唱えたのは「Eduard Bernstein」であるから、「A」は「E」の誤植と考えられる。

(40) Popper [OS], pp. 320-321.

(41) *ibid.*, p. 140, 335. 原文イタリック。

(42) この社会的自由主義の伝統は、ポパーの生まれる以前からすでにあったのである。例えば、オーストリアにも「ばら社会改革」に取り組んだ「社会進歩党」(Sozialpolitiker)と呼ばれる小さな党があった。それはウィーン・フェビアン協会とほとんど同一の政治的立場をもった党で、彼らは社会民主党を支持する労働者にアピールすることはできなかったが、「自由」の理念を労働者階級にまで拡げようと試みたのである。その黨員、および黨員ではないが密接な協力者には次のような著名な人々がいる。

黨員「Eugen von Philippovich (経済学者)」「Julius Othner (法律家)」「ヤー・ン・フ・ゴ・ン協会会長)」「Ferdinand Kronawette. 協力者「Ernst Mach (物理学者)」「哲学者)」「Wilhelm Jerusalem (哲学者)」「Joseph Popper-Lynkeus (哲学者)」「發明家)」「Rudolf Goldscheid (社会学者)」「Alfred Kiaar (時事評論家)」「Engelbert Pernerstorfer (社会改革者)」「のら社会民主党入党)」「Werner J. Cahnman. Adolf Fischhof and his Jewish Followers, in *Leo Baeck Year Book*, 4, 1959, pp. 111-138. 『知的自伝』によると、ポパーは初期の知的発達に最大の影響を与えた人として「Arthur Arndt」を挙げてゐるが、彼は非「

ルクス主義的社会主义者であり、しかも『マインツ一元論者同盟』(Deutscher Monistenbund)に深く関心をもちつた人物である。この『マインツ一元論者同盟』は、マインツ W. Ostwaldによつて始められた運動で、彼ののちぎつた「半社会主义者」ポパーリヒンコイスに追従するものがかなり多くいたのである。ポパーとポパーリヒンコイスは、名前だけの類似ではなく——彼らは遠く親戚関係にある——、思想的にも非常に密接な関係にあることが知られる。Popper [IA], pp. 7-8.

(註) J. W. N. Watkins, Does Critical Rationalism provide a Moral-Political Philosophy?, in *Wittgenstein, The Vienna Circle and Critical Rationalism*, ed. by H. Benghel, A. Hübner, E. Köhler, Hölder-Pichler-Tempsky, Vienna, 1979, p. 382.

(たかほな・あさ)